

小姓となる女—*The Two Gentlemen of Verona* の Julia の場合

大阪芸術大学 文芸学科 教授 団野恵美子

16世紀から17世紀にかけて、約150年もの間、イギリスでは女性向けの日常生活の手引書、女性の地位に関する論説や説教集、礼儀作法書が出版されてきた。父権制社会における女性の立場や結婚について、家庭生活手引書などの影響があることは、シェイクスピアの劇作品からも見てとれる。

社会に男性優位主義が流布していても、独身を貫くエリザベス一世が国を治めており、強情で喧しい女性を嘲笑する歌や芝居が多く見られ、シェイクスピアは男性社会で自立しようとする男装するヒロインを繰り返し描いている。

ウィリアム・シェイクスピアの『ヴェローナの二紳士』(*The Two Gentlemen of Verona*, 1594) は、ヴェローナの二人の紳士 Valentine と Proteus の友情と恋愛の行方が主題となっている。Proteus の Julia への恋煩いを揶揄していた Valentine が名声を求めてミラノへ赴き、親友を羨ましく思いながらも Proteus は恋愛を優先してヴェローナに留まる。Proteus は恋文を届けて Julia の愛を勝ち得るが、息子に広い世界で教養と研鑽を積ませたい父親の意向で、親友のいるミラノ大公の宮廷へ送り込まれたことから、Proteus の一連の裏切り行為が始まっていく。

一方で Valentine はミラノ大公に信頼されながらも、秘密裏に大公の娘 Silvia と駆け落ちの約束をして実行しようとしている。Proteus は永遠の愛を誓い合い指輪を交換した Julia も、双子のように仲のいい Valentine も裏切り、Silvia を奪おうと画策する。その際には、ミラノ大公の信頼も踏みにじり、自分の欲望のままに不義理を重ねる Proteus は、男同士の絆をどのように取り戻すのか、二組の男女の恋愛模様はどう結末を迎えるのか。また、小姓や召使という立場は、常に主人の日常生活を支えることから、登場人物の行動を左右する重大な役割を担っている。Valentine は召使に Silvia の気持ちを教えてもらい、Proteus も直接自分で言うのではなく、恋の使いを召使に頼む。Julia は恋人選びを侍女の判断に任せ、彼女との対話を通して恋心を明確にする。建前と本音の違いを教える役目も召使に任せられ、二紳士が恋愛に至る過程にも、貞淑な娘であった Julia や Silvia が恋ゆえの大胆な行動をする過程にも、それぞれの召使や小姓の働きが欠かせない。特に Proteus の愛を受け入れた理由と、裏切られた後に小姓に変装した Julia が愛を取り戻すまでの出来事には、主人に仕える召使たちの役割が大きく描かれている。

1. Julia の男装と Lucetta の助言

Julia は、Proteus に会うためミラノまで安全に

旅をするために男装をする。そのために力を貸すのは侍女の Lucetta であり、侍女に事情を話すことで Julia は具体的な旅の計画を練っていく。

最初は「相談に乗って」「どうすれば私の純潔を穢さずに旅をして、愛しいプロテーアスのところまで行けるか教えて」と他力本願だった Julia も、Lucetta に Proteus の帰国を待つのが一番だと諭されると、「恋の火は、抑えれば抑えるほど燃え上がるもの」と恋の炎が一気に燃え上がり、艱難辛苦があるかと自力で旅することを決意する。小姓の男装をするのも、女好きの男性に付きまとわれないようにするためであり、髪は切らずに絹の紐と一緒に編み込みまとめると大丈夫だと、服装の細部まで自分で決定している。そして「私の品物も、土地も、評判も私ものは何もかもお前に任せるから好きにして」と Lucetta を信頼して、旅立ちの準備とその後の家政までも侍女に委ねている。

2. 偽りと真実

『ヴェローナの二紳士』は、構造的に偽りと真実が言説や服装で繰り返されている。友情と恋愛のどちらを選択するかという主題には、表層的な言葉と秘められた真意を探る恋の駆け引き、恋敵を出し抜く術、親友を陥れる罠など「変装」以外にも「外見」と「真実」という要素が含まれている。

Julia は Proteus から届いた恋文を「たかが恋の告白でなんて大騒ぎだろう」と侍女の前で破っておきながら、「憎たらしいこの手、大事な愛の言葉を引き裂くなんて」と言って切れ端の手紙を読もうとし、慎み深いとされている態度と正直な本心の対立を感じている。散らばった紙切れに「風よ、手紙の文字を全部読んでしまうまで一文字も吹き散らさないで」との言葉に、Julia が本音で恋に向き合おうとする情熱が表れる。また最後に Proteus に証拠となる指輪を見せながら正体を明かし、「私がこんなはしたないなりをしたことを恥と思いなさい」「男が心を変えるのに比べれば女が姿を変えても慎みの汚点とは言えません」と、慎み深さは外見ではなく、心で示すものだと言っている。

言葉では親友だといいつつながら、Silvia を奪うために策略を巡らす Proteus に対して、Julia は上辺は情熱的な恋心を示すことに躊躇し慎み深さを演出するが、真実は身元を隠し愛する男の小姓になってまで愛を取り戻そうとする。Julia にとっては、男装することが男らしい行動様式を示すだけではなく、そうした行動そのものが、女性が機知と策略で困難を乗り越える情熱を示すものになっている。